

成沢家 父方の記録

成沢城跡

義の譜

ぎのふ

成沢城から、雪の苗穂へ。

成沢城の侍から、成澤義雄まで | 2026年7月 編纂（取材継続中）

表紙写真：「成沢城跡」の標柱と瑞穂（山形市・2013年4月）／撮影：成沢恵（家蔵）

一枚の家系図から

PROLOGUE

出羽の国に、成沢城という城があった。

——そこを守った侍・成沢道忠が、この家の先祖だと伝わる。

父・義雄は言う。「先祖を辿ると、**成沢道忠**という田舎侍に行き着く」「先祖は百姓兼田舎侍だ」と。山形県の**余目（あまるめ）**のあたりが、その土地だという（鶴岡・大山にも成沢姓の親類が多く、「大山のおばさん」の記憶もある）。名字の「成沢」は、地名から起こった——大雨のとき沢が轟音を立てて「鳴る」ことから「鳴沢」、のちに「成沢」。その名を負う城が、出羽の山あいには実在した。

成沢城は、出羽の大名・最上氏の一族が築いた山城である。最上家の祖・斯波兼頼の孫**兼義**が一三八三年に築き、地名を取って「成沢」を名のった。以来およそ二百四十年、最上領の南を守る最前線の城でありつづけた。その系譜の末に立つのが、伝説の武将・**成沢道忠**——この城とともに語り継がれた、この家の先祖である。

その侍の家が、なぜ庄内の在に移り、百姓を兼ねる田舎侍となり、やがて海を越えて札幌へ渡ったのか。そして八人きょうだいの七番目が、なぜ英語学者になったのか。手がかりは、そろった。二〇二六年七月、一枚の**家系図**（幕末の**成澤勘左エ門**に始まり義雄の世代までを記す。のちに義雄自身が孫の代までを書き加えた）。父母への聞き取り。そして——従弟の**成澤有**が集めてくれた、二十六頁の**戸籍謄本**である。有は、二〇二四年夏に世を去った義雄の弟・正人の長男。父を送ったばかりの従弟が、明治から続く一族の除籍謄本を一式そろえて届けてくれた。

戸籍は、家の記憶を裏づけ、ときに書き換えた。ルーツの村の名。北へ渡った本当の事情。生まれた家の番地。記憶で語られてきた物語を、記録で確かめ直したのが本書である。

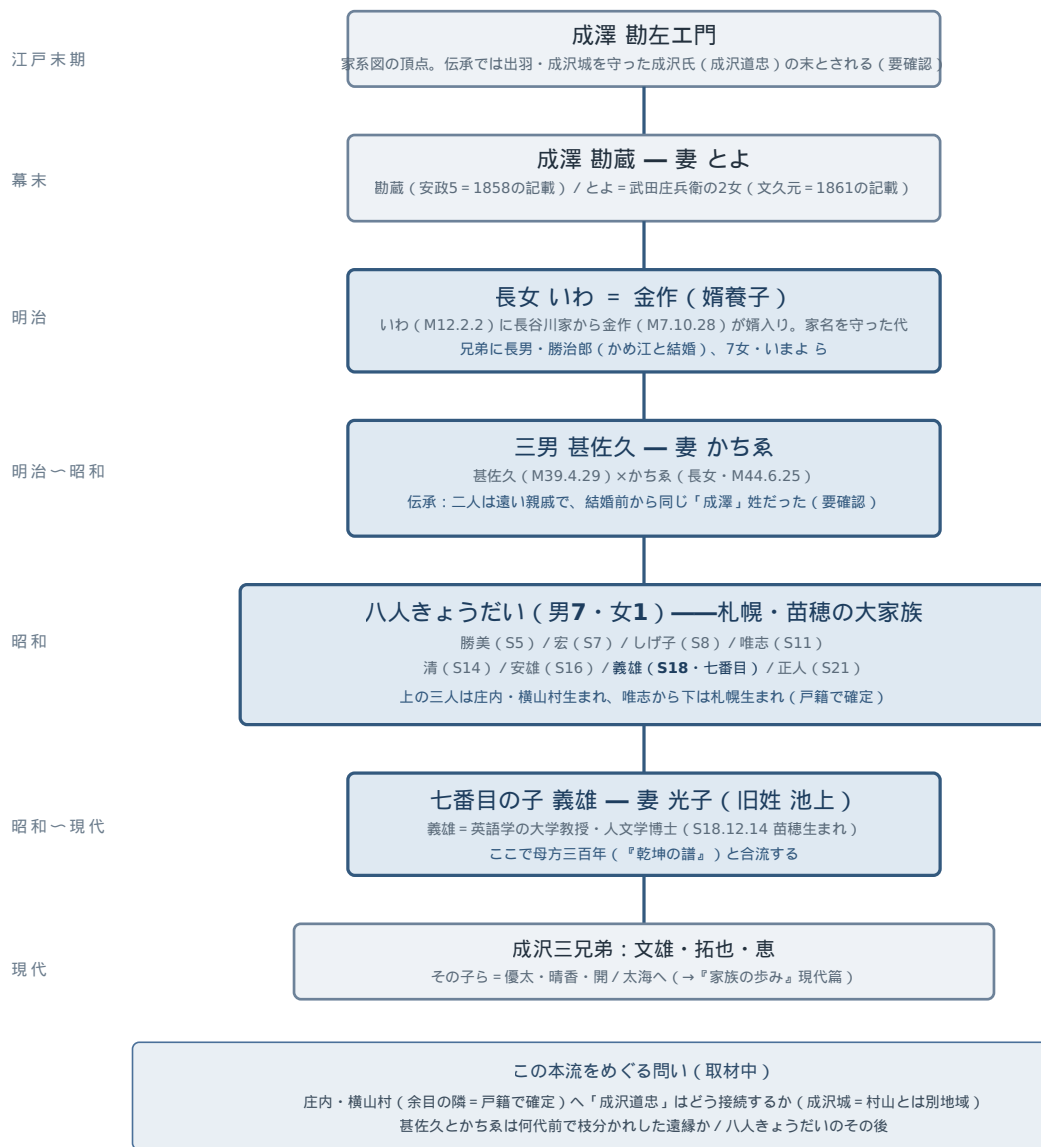
見取り図	父方の本流 —— 幕末から義雄まで
第一部 源流	成沢城と道忠／庄内・横山村（余目の隣）——戸籍が指した村
第二部 海峡	娘ばかりの家／婿に呼ばれた男／数週間の逆転／兄たちのいる札幌へ
第三部 義雄	雪の街に生まれて／英語の道／海を渡った教育者
資料編	家系図（書き起こし）／年表／結び「記録する人の連鎖」・要確認事項

資料の取り扱いについて。本書の核は、①家蔵の家系図（義雄の加筆訂正入り・2026年7月）、②成澤勘左エ門～勝治郎の改製原戸籍（全20頁）と成澤甚佐久の戸籍（全6頁）、③義雄本人・家族の証言である。手書き戸籍の判読には誤りがありうるため、断定できない事項は「要確認」と明記し、推測による脚色は加えていない。取材の進展にあわせて更新する。

父方の本流 —— 幕末から義雄まで

THE MAIN LINE

家系図（家蔵）にもとづく。藍色＝本流。日付は判読値（要確認）。



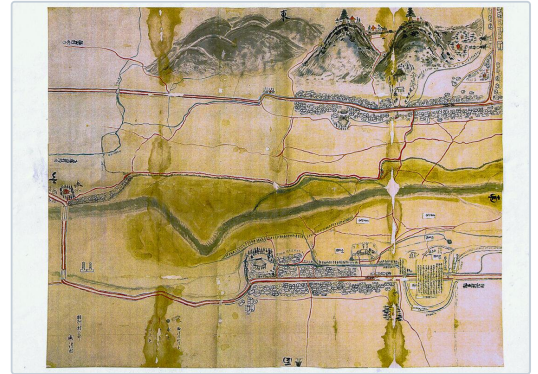
出羽の山城 ― 成沢城と成沢氏

NARISAWA CASTLE

この家の名字の源には、ひとつの城がある。出羽国・いまの山形市の南、蔵王のふもとに築かれた山城――**成沢城**である。

南北朝の一三八三年（永徳三年）、出羽の大名・最上家の祖である斯波兼頼の孫**兼義**が、須川のほとりに城を築き、やがて「成沢」の地へ移した。兼義はその地名を名字とし、**成沢氏**を称する。以来この城は、長谷堂城と並んで**最上領の南を守る最前線**として、およそ**二百四十年**ものあいだ在りつづけた。標高二〇〇メートル、比高六〇メートルの、山を利用した堅い城だった。

「成沢」という地名そのものが、この土地の険しさを語っている。もとの字は「**鳴沢**」――大雨のとき、沢の水が一気にあふれ、轟音を立てて「**鳴る**」ことから来た名だという。荒ぶる水の音を名に持つ沢の城。それが、成沢という名字のふるさとである。



成沢城の絵図。山あいには曲輪と堀をめぐらせた山城の姿が描かれている。（出典：My favorite things about Yamagata）



上空から見た現在の城跡。本丸広場・二ノ丸跡・外堀、そして城名の由来「鳴沢川」の位置がわかる。（出典：同）



本丸跡。土塁と曲輪の地形が、いまでも山上に残る。（出典：同）

伝説の武将 ―― 成沢道忠

成沢氏の系譜は、兼義から義総・義佑・義清と続き、その末に**成沢道忠**が現れる。この道忠こそ、家に伝わる先祖である。伝承の道忠は豪傑である。一五七〇年代、上山勢と伊達勢が最上義光に対峙した**柏木山合戦**では、齢七十にして成沢城を守り、一五八五年の**安保攻め**では五千騎を率いて敵城へ攻め寄せたという。義光の死後は跡目争いに敗れ、陸奥へ落ちのびた。（もっとも、これらの武勇伝は年代が合わず、成沢氏の親子二～三代の事績を道忠一人にまとめた「伝説」だろうと研究者は見る。それほどに、語り継がれた名だったということでもある。）

そして一六二二年（元和八年）、**最上家が改易**となり、成沢城は廃城となった。二百四十年の城の歴史が閉じ、成沢の侍たちは、仕える主を失って各地へ散っていく。

「義」の名跡。系譜を眺めていて気づいたことがある。兼義・義総・義佑・義清――**最初の成沢家は「義」の一字を代々継いでいた**のである。それから六百年。苗穂の八人きょうだいの七番目は、赤穂義士討ち入りの日に生まれたことから「義雄」と名づけられた（→第三部）。名づけの由来はまったく別だと分かっている、六百年ぶりに「義」の字が戻ってきたようで、少し嬉しい偶然である。

要確認：この成沢氏（山形・村山＝最上領の成沢城）と、父が語る庄内・余目の成沢家との直接のつながり（下記・第一部(2)）。成沢城と余目は同じ出羽でも地域が異なり、「落ち武者が余目で農民化した」という筋は現時点では仮説である。

末裔、城に立つ ― 二〇一三年の成沢城

DESCENDANTS AT THE CASTLE

この城跡には、すでに立った成沢がいる。三男・恵である。先祖の足跡をたどるために、この地を訪問していた。

二〇一三年四月、恵は妻の瑞穂とともに、先祖の足跡をたどるために山形の成沢城跡を訪問した。兄弟が家系図を手にして本格的に系譜を調べ始めるより、十三年も前のことである。城跡は小高い山の上にあり、八幡神社が建ち、周囲には田畑が広がる。天守は再建され、桜の季節だった。山上から地形を眺めれば、この城が最上領の南を守る要所であったことが、おのずと納得される。



「成沢城跡」の標柱と恵（2013年4月）。六百三十年前に「成沢」の名が生まれた場所を訪ねた末裔。（家蔵写真）

それから十三年。兄弟が家系図を読み解き、この城が一族の名の源だと確かめたとき、恵のアルバムから二十九枚の写真が出てきた。本書がいま辿ろうとしている道を、弟はすでに十三年前に歩いていたのである。系譜を調べるという営みは、この兄弟のあいだで、誰かの思いつきで始まったのではなかった。

ちなみに末弟が先祖の城を訪ね、次男と長男が野蒜の海（→『乾坤の譜』）で釣りをしていたことを思えば、この一族はどうやら、ゆかりの土地に自ずと足を向ける性分らしい。

※地名の元の字は「鳴沢」。城跡のかたわらの標柱にも「成澤城趾」と旧字で刻まれている。



境内の「成沢城跡」の柱のかたわら、八幡神社へ向かう瑞穂（2013年4月）。夫婦二人の、先祖をたずねる旅だった。（家蔵写真）

戸籍が指した村 ― 庄内の田舎侍

FROM CASTLE TO COUNTRYSIDE

最上改易と、庄内への道

一六二二年の最上改易ののち、旧領は分割され、庄内には酒井氏が入って庄内藩が置かれた。禄を失った最上の侍たちの多くは、刀を鋤に持ちかえ、土地に根を下ろして生きる道を選んだ。家に伝わる「先祖は百姓兼田舎侍」という言葉は、この姿と重なる。（ただし成沢城は山形市南部＝村山地方、この家の在所は庄内で、地域が異なる。両者を結ぶ「落ち武者→庄内で農民化」は、いまのところ仮説である。）

本籍地、確定する ― 東田川郡横山村

父・義雄は「余目（あまるめ）のあたり」と語ってきた。戸籍は、その記憶を一步、精密にした。改製原戸籍に記された本籍は――山形県東田川郡横山村 字前田（現在の東田川郡三川町横山）。余目に隣り合う、庄内平野のただなかの村である。「余目のあたり」は、文字どおり正しかった。村は「三人に一人は成沢」といわれるほど成沢姓が寄り合う土地で、家老・成沢の末裔を名乗る家々が、田を耕しながら暮らしていた。

では、家の記憶にある「大山のお婆さん」――鶴岡・大山の親類は何者か。これも戸籍が答えた。のちに登場する勝治郎・かめ江の六女・末子（すえこ）が、昭和のなかば、西田川郡大山町の佐々木家に嫁いでいる。余目の隣の横山村が本家、大山は叔母の嫁ぎ先。家の記憶に混在していた二つの地名は、こうして一本の線につながった。

※戦国の道忠（十六～十七世紀）と、下の家系図の頂点・勘左エ門（幕末＝十九世紀前半）の間には、およそ二百年の空白がある。「先祖は成沢道忠」は、世代を大きく飛び越えた遠い言い伝えとして受けとめたい。両者を結ぶ確かな記録は、これからの取材の宿題である。

幕末の成澤家 ― 勘左エ門から勘蔵へ

家系図の頂点には成澤勘左エ門、続いて成澤勘蔵の名がある。勘蔵は安政五年（一八五八年）生まれ、妻・とよは文久元年（一八六一年）生まれ――ペリー来航から数年、幕末の動乱期に生を受けた夫婦である。とよは武田庄兵衛の二女。とよが昭和二十一年（一九四六年）まで生きたという記載が正しければ、幕末生まれの人が、終戦の翌年まで一族を見守っていたことになる。家系には金作が養子に入り（戸籍では勘左エ門・とよの養子。妻は長谷川家の出のいと（いわ）とみられる）、その三男として、次章の主人公・甚佐久が生まれる。

要確認：金作の実家（戸籍の「飯井（長井？）大治郎」の判読）と養子縁組の相手方。「勘左エ門」の名は代々の襲名だった可能性がある（戸主・勝治郎が家督相続ののち「勘左衛門」を名乗ったと読める記載あり＝大沼本家の「新左衛門」襲名と対をなす。精読継続中）。家紋。道忠と勘左エ門の間の約二百年。

娘ばかりの家 ―― 婿に呼ばれた甚佐久

THE ADOPTED SON

横山村の成澤本家――勝治郎とかめ江の家には、悩みがあった。かちゑ（明治四十四年生）を頭に、生まれるのは娘ばかり。大正十三年四月七日、待ちに待った長男・春雄がようやく産声を上げた。だが戸籍は無情に記す――「同日死亡」。生まれたその日に、春雄は逝った。

もう男子は望めない。勝治郎夫妻は決断する。大正十五年七月二十六日、遠縁の二十歳の青年・甚佐久（金作の三男）を養子に迎えた。村は「三人に一人は成沢」の同族の土地。甚佐久も結婚前から同じ「成澤」の姓だった。長女かちゑと娶わせ、家を継がせる――そういう縁組みである。

ところが、である。養子縁組からわずか数週間後の大正十五年八月、かめ江は男の子を産んだ。二男・勝雄。あきらめていた実の跡取りが、婿を迎えたその矢先に現れたのだった。親は当然、実の息子に家を継がせたい。跡取りのはずだった甚佐久は、跡取りではなくなった。（事実、戦後の昭和二十四年、横山村の家の新しい戸主となったのは勝雄である。）

数週間の逆転。春雄の死（大正13年4月7日）、養子縁組（大正15年7月26日）、勝雄の誕生（同年8月）――戸籍に残る三つの日付が、家の伝承「婿に呼ばれたが、あとから男の子が生まれて、家を出た」を裏づけた。もし勝雄の誕生があと数週間早かったら、甚佐久は養子に入らず、北海道へも渡らず、義雄も、この一家もなかったかもしれない。

海峡 ―― 兄たちのいる札幌へ

ACROSS THE STRAIT

行き場を失った甚佐久には、頼る先があった。札幌である。戸籍をたどると、金作の子どもたち――甚佐久の兄姉は、大正から昭和のはじめにかけて、相次いで海を渡っていた。兄・誠太郎は大正九年にはすでに札幌・元村町（いまの東区、苗穂のすぐ近く）で長男をもうけ、大正十二年に分家届を出している。姉・てつせも札幌で暮らし、弟・立身ものちに続いた。大叔母のいまよは札幌の松田家に嫁いでいる。屯田兵このかた「昔のアメリカ」のような開拓地だった北海道には、東北から渡る者が絶えなかった――成澤の家からも、一人、また一人。

甚佐久とかちゑは、婿縁組の枠の外で夫婦になった。長男・勝美（昭和五年）、二男・宏（昭和七年）、長女・しげ子（昭和八年）は、まだ横山村の生まれである。婚姻届は昭和七年十二月九日。そして昭和八年から十一年のあいだに、一家は海峡を渡った――四番目の唯志（昭和十一年十月）は、札幌で生まれている。父母の記憶では、甚佐久がまず先に渡り、かちゑが幼子を連れてあとを追ったという。

※一家は札幌に移ってからも、本籍を横山村の勘左エ門戸籍に置いたままだった。甚佐久が分籍して札幌に新しい戸籍を作るのは、戦後も七年たった昭和二十七年四月二十一日のことである。家を出た男は、紙の上では二十年ちかく「横山村の家の一員」であり続けた。

雪の大家族 ―― 北八条東十一丁目

THE FAMILY IN SAPPORO

札幌での住まいは、まず北十条東十丁目、やがて北八条東十一丁目三百九十五番地――家族が「苗穂の家」と呼ぶ、あの家である。甚佐久とかちゑはここで八人の子を育て上げた。男七人、女はしげ子ただ一人。（家では長く

「農家の家」と語り継がれてきたが、これは誤りだった。義雄によれば甚佐久は札幌で職を転々とした——三越の関連、学校の小使い、そして五番館の精米所など。暮らしは貧しく、広い庭で鶏を飼い、正月にはそれを締めて食べたという。）

1 勝美	昭和5年（1930）2月3日・横山村生まれ。妻・清江。苗穂の家の隣に住んだ
2 宏	昭和7年（1932）1月2日・横山村生まれ。故人
3 しげ子	昭和8年（1933）11月9日・横山村生まれ。唯一の女子
4 唯志	昭和11年（1936）10月19日・札幌生まれ（渡道後最初の子）。昭和42年、結婚して東京・中野へ
5 清	昭和14年（1939）2月26日・札幌（北八条東十一丁目）生まれ
6 安雄	昭和16年（1941）7月25日・札幌生まれ
7 義雄（父）	昭和18年（1943）12月14日・札幌市北八条東十一丁目395番地生まれ
8 正人	昭和21年（1946）2月14日・札幌生まれ。結婚して旭川へ、のち札幌・手稲。令和6年（2024）8月10日逝去（享年78）

※生年月日・出生地は戸籍（甚佐久戸籍・勘左エ門戸籍）による確定。名前の順は生年順。きょうだいのその後の人生は、今後の取材課題。

家系図が正した一つの事実。父・義雄の生年は、長く家の記憶で「昭和十四年」とされてきた。だが家系図は「昭和十八年」と記し、きょうだいの生年の並び（清＝昭和14 → 安雄＝昭和16 → 義雄）とも合う。本人に確かめると——昭和十八年（一九四三年）十二月十四日が正しかった。一枚の紙が、七十年來の思い込みを正した。

苗穂の家——杏の木のある家

この苗穂の家を、孫の拓也は夏の帰省で覚えている。庭には杏（あんず）の木があり、実を採った記憶がある。隣には長男・勝美の一家が住んでいた。勝美は無類の車好きで、とりわけ日産を好んだ——のちに弟・義雄が日産の車を乗り継ぐのは、この兄の影響だという。勝美の子とみられる「ノブちゃん」はバイクを愛し、のちに仙台へ移って、義雄・光子とも交流を続けた。（勝美一家の人びとの名や現況は、これからの取材で確かめたい。なお父母の話では、祖父を「仁作（にさく）」、祖母を「八重」と呼ぶこともあった——家系図の甚佐久・かちゑと同じ人である。）

雪の街に生まれて ― 七番目の子・義雄

YOSHIO, THE SEVENTH CHILD

昭和十八年（一九四三年）十二月十四日、義雄は札幌市北八条東十一丁目三百九十五番地——「苗穂の家」に生まれた。戦争のさなか、八人きょうだいの七番目。誕生日は赤穂浪士討ち入りの日——その所以で、赤穂義士の「義」を採って「義雄」と名づけられた。庄内の田舎侍の血筋に、忠義の日の名前である。

終戦のとき、義雄はまだ幼かった。進駐軍の兵士にもらった一本のコーラが、アメリカへの憧れの原点だった——と家族は伝える。八人きょうだいの七番目は学問の道を選ぶ。苗穂の家から歩いて苗穂小学校へ、やがて札幌東高等学校から北海道学芸大学（現・北海道教育大学）岩見沢校の中学校課程英語科へ。しかも入学試験を一番で通り、入学式では総代（新入生代表）を務めて、新聞にも載った。その翌年、二番の成績で入ってきた新入生が、池上光子である。のちに光子の父・池上茂雄（理学博士）が二人の結婚を「成績が一番と二番の天才同士が結婚した」と喜んだのは、比喻ではなく、文字どおりの事実だった。

義雄はさらに北海道大学大学院で英米文学を修める（修士課程、博士後期課程を経て昭和四十九年に博士課程修了。博士課程の同期は二人——普通は一人いるかいなかで、当時としては非常に珍しかった）。結婚は昭和四十四年（一九六九年）六月——婚姻届は岩見沢市役所に出され、二人の新しい戸籍も岩見沢に置かれた（戸籍で確定）。結婚した当初、義雄はまだ大学院生で定まった収入がなく、ひと足先に高校教師となっていた光子が家計を支えた。もっとも義雄も遊んでいたわけではない。各地の高校で英語の非常勤講師を務め、国鉄の養成所——苗穂工場の中にあった「鉄道学校」——でも英語を教えた。中学を出た少年たちが三年で高卒資格を得る技術者養成の課程で、月におよそ三万円。光子の月給とほぼ同じ額を、若い夫はアルバイトで稼ぎ、帰り道には生協でおかずと野菜を買って帰った。

そして一九七一年、宮城教育大学の助教授として仙台へ赴任する（次男・拓也が生まれる直前のことだ）。この就職には、後日談がある。当時の就職は指導教員が見つけてくるもので、宮教大に英語の欠員が出たと聞いた義雄は、「明日返事します」も許されず、その場で「行きます」と即決した。ところがその二、三日後、別の先生が函館教育大学の口を用意していたのである。義雄はそれを知らされなかった。後年その先生から「成沢さん、函館に行けたんだよ」と聞かされ、義雄は言う——「あのとき違うと言っていたら、俺は墓場にいたと思うよ」。仙台は、妻・光子の母方・大沼家三百年のルーツの地。何も知らずに選んだ赴任先の知らせに、義母・徳子は驚き、大喜びしたという（『乾坤の譜』）。のちに義雄は東北学院大学の教授へ（一九八九年四月～二〇一一年三月、定年まで）。

雪と、剣道と、自転車と ― 若き日の義雄

雪の街に育った義雄は、スキーもスケートも得意だった。晩年、息子に「どちらが得意だったか」と問われると、少し考えて「スキー」と答えている。その腕前は仙台へ移ってからでも衰えず、宮城県のスケート大会（成人の部）に出場して上位に入ったほどである。ふだん子育てに関わらない義雄が、冬のあいだだけは息子たちをスキー場やスケート場へ連れ出した——その顛末は、現代篇『家族の歩み』に詳しい。

そしてもうひとつ、義雄には剣道があった。二段である。オーストラリア留学の時期も、現地で稽古を続けていたという。庄内の田舎侍の裔が、南半球で竹刀を振っていたのである。（段位の取得時期は要確認。）

スケートについても、履歴書は控えめな家族の記憶を上書きした。日本スケート連盟のスケート指導員A級、そして宮城県成人スピードスケート五〇〇メートル・一〇〇〇メートル、ともに二位・知事賞。息子たちは長らく「北海道育ちだから、仙台では得意に見えただけ」と思っていたのだが、どうやら本当に速かったらしい。

継承ノート — 武の血。義雄の剣道は、孫の開（文雄の次男）に流れた。開は剣道でインターハイまで進んでいる。次男・拓也もいまブラジリアン柔術に通い、青帯を締めている。祖父から孫へ、そして息子へ。遠景に成沢城の老将・道忠を置けば、「武の血」は六百年ごしに戻ってきたことになる（道忠の部分は、例によってこじつけである）。

学者になる前の義雄は、存外に活動的だった。大学時代はサイクリング部に入り、自転車で北海道の各地を巡ったという。仙台へ移ってから、中山の公務員宿舎の物置には、サドルのない古いロードバイクが眠っていた——「サドルは盗まれた」と本人は言っていた。

車も好きだった。ダイハツ・フェローマックスに始まり、日産のサニー・スタンザ・セドリック、そしてトヨタ・カムリと乗り継ぐ。日産づいてるのは、車好きの兄・勝美の影響である。英語学者として車名の「サニー」を「英語としてはおかしい」と評しながら、そのサニーに乗っていたのは、いかにも義雄らしい。雨の日、そのサニーで三台がからむ事故に遭ったこともある。大雨のなか、ハンドルを小径に改造したトヨタ・スプリンターがスリップし、水しぶきを上げて対向車線から飛んできて、サニーの左側面に突っ込んだ。運転していたのは二十歳ほどの若者で、「ごめんなさい」と謝ってきたという。義雄は言う——「もう少しセンター寄りだったら、死んでいただかもしれない」。大きな怪我はなかったが、膝の痺れが残り、以後しばらくは、雨が降るたびに怖かったという。

のちに息子・拓也は、三十代の終わりから四十代にかけて（二〇一一～一七年ごろ）、ロードバイクに深くのめり込む——六台を乗り継ぎ、遠征費も含めれば五百万円を超えるほどに。その遠い伏線は、案外、この物置に眠っていた一台にあったのかもしれない。

深夜の街の声 — ラジオ・パーソナリティ義雄

仙台での義雄には、大学の教壇とは別の顔があった。TBC（東北放送）ラジオの帯番組「ams ラジオ プレス」のパーソナリティである。月曜から金曜、夜十時から十分間——「生きた街の情報を、おもしろトークでつづる一週間」を掲げ、月曜は音楽、火曜はスポーツ、水曜はファッション、木曜は本と映画、金曜はエトセトラと、曜日ごとに表情を変えて、街の話題を語った。英語学者が、深夜の電波で軽妙に喋る——「宇宙人みたいな父」の、もう一つの横顔である。



開局30周年

生きた街の情報を
おもしろトークでつづる一週間。

ams ラジオ プレス

月～金 PM10:00～10:10

パーソナリティー

成沢 義雄

- 月曜／音楽
- 火曜／スポーツ
- 水曜／ファッション
- 木曜／本と映画
- 金曜／エトセトラ

TBC「ams ラジオ プレス」のチラシ。「開局30周年」のロゴと、パーソナリティー成沢義雄の名。月～金 PM10:00～10:10。ポケットティッシュに差し込み、街頭で配られた販促物で、段ボール数箱ぶんが刷られた。（家蔵）

このチラシは、二つの手がかりから一九八二年（昭和五十七年）のものと定まる。TBCラジオの開局は昭和二十七年（一九五二年）五月一日——その開局三十周年が、ちょうど一九八二年にあたる。もう一つ、番組名の冠

「ams」は、同じ一九八二年四月に仙台駅前へ開店した百貨店「ams西武」と同名である。開局三十周年と新百貨店の開店——二つの祝祭に重ねて仕組まれた番組だったとみられる。当時、義雄は宮城教育大学の助教授（三十八歳）。学者の本業のかたわら、街のメディアにも声を貸していた。

そしてこのチラシには、次男・拓也自身の記憶が結びついている。ポケットティッシュに差し込まれたこのチラシを、小学生の拓也が同級生に配って歩いたのである。父の声が電波に乗り、その番組のチラシを、息子が校庭で手渡す——親の仕事が、子の日常のなかにまで及んでいた一枚である。

この一枚が語る年。「開局30周年」＝TBCラジオ開局（1952年5月）の三十年後＝1982年。番組名の「ams」は同年4月開店の「ams西武」と同名で、二つの記念に重ねた企画とみられる。義雄38歳、宮城教育大学助教授の頃。（要確認：番組の放送期間・共演者・企画の正式名称。）

海を渡った教育者



米デラウェア州ドーバーの地方紙『Delaware State News』（1995年春）の義雄。「日本の学生の成功を支えているのは、学生がよく勉強するという事実だ」——フルブライト研究者・ウェスレー大学客員研究員 Yoshihiro Narisawa として、日米の教育を語る。（家蔵）

海外出張の多い研究者だった。オーストラリアには幾度も渡り、長いときは一年（若い拓也たち家族を一ヶ月呼び寄せた）。イギリス赴任には光子も同行した。



★呼び寄せられた一ヶ月——義雄のシドニー大学院留学中（昭和51年1月～52年2月）、光子と幼い二人の息子が豪州へ渡った。背景の砂岩のゴシック建築はシドニー大学のクアドラングル。デニム上下にサングラスの義雄、青いコートの光子、文雄（六歳ごろ）と拓也（四～五歳ごろ）。厚着と芝の色から、南半球の冬とみられる。（家蔵）

この一枚は、家の記憶を裏づける写真である。「父は一年オーストラリアに行っていて、僕たちも一ヶ月だけ呼ばれた」——息子たちがそう語ってきた滞在は、履歴書が明かしたシドニー大学院TEFL課程（首席卒業・日豪学術交流基金一期生）の日々だった。父が学んだ大学の中庭に、家族四人が並んでいる。

そして一九九五年、フルブライト研究者（Fulbright Scholar）として米国デラウェア州のウェスレー大学に客員研究員として迎えられ、五月まで日本の歴史・文化・教育を講じた。現地の二紙が義雄を大きく取り上げ、日米の教育を語るインタビューを載せた——「われわれの制度は硬直的で、あなたがたの制度は柔軟だ」。コーラー本から始まったアメリカへの憧れは、教壇の上で果たされた。のちに人文学博士（Doctor of Humanities）——ウェスレー大学からの名誉学位である。



『The Dover Post』1995年4月12日（水）の特集——見出しは「His first taste of America was a sip of Coke（初めて味わったアメリカは、一口のコーラだった）／45 years later, he's still drinking in American culture（45年後もなお、アメリカ文化を味わい続けている）」。終戦直後に進駐軍の兵士がくれた一本のコーラが、義雄のアメリカへの憧れの原点だったという逸話を、当時51歳の本人が語っている。（家蔵）



東北学院大学の学長応接室で開かれた昼食会。ウェスレー大学から義雄に人文学名誉博士号（honorary Doctor of Humanities）が贈られた。前列左からミラー博士、成沢博士、クアマト博士。（家蔵／米紙掲載）

家庭での義雄——「宇宙人みたいな父」、枕元の自作物語に毎回登場するアントニオ猪木、オーストラリア土産のブーメラン、運動靴に大書された「なりさわ」——は、現代篇『家族の歩み』に詳しい。

この一枚が正した事実。米紙の掲載年は長く「1990年」と伝えられてきたが、実物の見出しは「**Wednesday, April 12, 1995**」。4月12日が水曜だったのは1995年である。年を1995年に正すと、記事中の「51歳」も昭和18年（1943）12月生まれと一致し、生年の裏づけともなった。

一枚の履歴書が埋めた空白（2026年7月）。本人名義の履歴書を得て、長く家の記憶に頼っていた父の歩みが確定した。学部は北海道学芸大学（家では「岩見沢教育大学」と伝わっていた。岩見沢は分校の名である）。義父・池上茂雄が教授を務めたのも、同じ北海道学芸大学（岩見沢分校）だった——義雄と光子の縁の起点は、やはりこの大学にあったとみえる。そして「オーストラリアに一年」「イギリスへ」と語られてきた滞在の正体も分かった。豪州はシドニー大学院のTEFL課程（昭和五十一年～五十二年）——首席卒業、日豪学術交流基金の一期生。英国はレディング大学大学院、ブリティッシュ・カウンシル基金による英語教授法の集中訓練（昭和五十八年）である。家族が「出張」と思っていた父の不在は、その都度、世界の教室へ学びに出ていた時間だった。

要確認：フルブライトの研究テーマ。『Delaware State News』掲載記事の正確な掲載日（切り抜きに写らず）。記念写真の同席者の和名（クアマツ博士／ウェスレー大学美術教授 Lon Fluman ほか）。人文学博士の授与日（履歴書に「平成9年7月2日」と「1998年5月16日」の二つの記載があり、米紙の授与写真は1995年の紙面）。

家系図 ―― 書き起こし

THE FAMILY TREE

成澤家（父方）家系図（家蔵・2026年7月受領）を書き起こした要旨。左端の成澤勘左エ門から、右列の八人きょうだい（義雄の世代）まで、五代が一枚に収められている。※家系図の原本写真は家蔵資料（オリジナルデータ）として別途保管し、本書には掲載しない。

第一世代	成澤 勘左エ門
第二世代	成澤 勘蔵 ― とよ（武田庄兵衛の2女。没 S21.2.14の記載）
第三世代	長男 勝治郎（M19）＝かめ江（M25・斎藤清太郎の長女）／長女 いわ（M12）＝金作（M7・婿養子、長谷川竜五郎の家から）／7女 いまよ ほか
第四世代	てつゑ（長女）／誠太郎（長男・M31）＝やよゑ → 松太郎・政雄・光子・國雄・秋子・花子・康雄ら／甚佐久（3男・M39）＝かちゑ（長女・M44）／4男（M42）／立身（5男・T4）／すゑの（3女・T8）ほか
第五世代	甚佐久×かちゑの8人：勝美・宏・しげ子・唯志・清・安雄・義雄・正人

※詳細な書き起こしと判読メモは素材DB「ルーツ」成沢家父方家系図」に収録。第四世代の「光子」は父方の別人であり、母・成沢光子（旧姓池上）とは無関係（混同注意）。中段の一群（いちせ・さだ子・春雄・勝雄・木子・きく子・利夫）の親は未確定。

年表 ―― 家と時代

CHRONOLOGY

1383（永徳3）	最上直家の孫・兼義が 成沢城 を築城、地名を取り 成沢 を称す（成沢氏の起こり）
1578（天正6）	柏木山合戦。成沢城が最上義光方の前線基地に。成沢氏は最上領南の守り
～1600頃	伝説の武将 成沢道忠 が成沢城を守ると伝わる
1622（元和8）	最上家改易、成沢城廃城 。庄内に酒井氏。成沢の侍は各地へ散る（→庄内・横山村への道か）
安政5（1858）	成澤勘蔵 生まれる（戸籍で確定。日米修好通商条約の年）。本籍＝ 山形県東田川郡横山村字前田
文久元（1861）	とよ（武田庄兵衛2女）生まれる
明治7（1874）	金作（のち成澤家へ養子）生まれる
明治39（1906）	甚佐久（金作の3男）生まれる
明治44（1911）	かちゑ（勝治郎・かめ江の長女）生まれる
大正9（1920）	兄・誠太郎、この頃すでに 札幌・元村町 に（長男誕生）。一族の渡道が始まる
大正13（1924）4.7	勝治郎家の長男・ 春雄 、生まれたその日に死亡
大正15（1926）7.26	勝治郎・かめ江、 甚佐久と養子縁組 （婿分として家を継がせるため）
大正15（1926）8	数週間後、実子・勝雄誕生 ——跡取りの座の逆転（→勝雄が昭和24年に家督）
昭和5～8（1930-33）	甚佐久・かちゑに勝美・宏・しげ子誕生（ 横山村生まれ ）。婚姻届は昭和7年12月9日
昭和8～11頃	一家、海峡を渡り札幌へ （兄・誠太郎らを頼る連鎖移住）。唯志（昭和11年）から札幌生まれ
昭和18（1943）	12月14日、義雄誕生 （札幌市北八条東十一丁目395番地。8人の7番目。赤穂義士討ち入りの日）
昭和21（1946）	正人（末子）誕生／とよ 没の記載（幕末生まれの祖母、終戦の翌年まで）
昭和27（1952）4.21	甚佐久、 分籍 。渡道から約20年を経て、札幌に成澤甚佐久の戸籍が立つ
終戦直後	幼い義雄、進駐軍兵士にコーラをもらう——アメリカへの憧れの原点（家族の伝え）
昭和34～37（1959-62）	義雄、 札幌東高等学校 に学ぶ
昭和37～41（1962-66）	北海道学芸大学 中学校課程 英語科 （現・北海道教育大学）。※義父となる池上茂雄も同大学教授（岩見沢分校）
昭和41～49（1966-74）	北海道大学大学院 で英米文学（修士課程→博士後期課程→博士課程修了）
1969（昭和44）6月	池上光子と結婚 （婚姻届＝岩見沢市長受附・戸籍で確定。新戸籍も岩見沢。義雄は大学院生で光子が家計を支えた）
1971（昭和46）4月	宮城教育大学 助教授に就任、仙台へ （～1988年4月）。翌1972年1月に次男・拓也が生まれる
昭和51～52（1976-77）	豪州シドニー大学院 TEFL課程に留学 。首席卒業・日豪学術交流基金 一期生（家族を1ヶ月呼び寄せる）

昭和57（1982）	TBCラジオ「ams ラジオ プレス」のパーソナリティを務める（TBC開局30周年／同年4月開店の「ams西武」と同名の帯番組。月～金・夜10時～10分）。宣伝チラシは小学生の拓也が同級生に配った
昭和58（1983）	英国レディング大学大学院でBritish Council基金による英語教授法集中訓練（6月～10月）。この滞在中、三男・恵が誕生（7月）
1989（平成元）4月	東北学院大学 教授（～2011年3月、定年退職）
1995（平成7）	米国政府招聘・フルブライト派遣教授として渡米、ウェスレー大学教授（1月～10月）。現地二紙に掲載。のちに同大学より人文学博士（Doctor of Humanities）。翌1996年4月、ウェスレー大学と米国フルブライト財団から感謝状
2011～（平成23～）	定年退職後も、コンサルティングや英語指導、福祉施設の役職など、名を連ねながら八十代まで働き続ける
2024（令和6）8.10	末弟・正人 逝去（札幌・享年78）。長男・有が一族の戸籍収集を始める
2026（令和8）	家系図と戸籍謄本二十六頁を受領・精読。本書『義の譜』を記録で書き直す（取材継続中）

※幕末～昭和の項は改製原戸籍（成澤勘左エ門～勝治郎・全20頁）および成澤甚佐久戸籍（全6頁）で確定。手書き戸籍の細部判読は継続精査中。

北の血、南の血

EPILOGUE

庄内の田舎侍から、雪の苗穂の大家族へ。八人きょうだいの七番目は英語学者となり、海を渡り、そして池上光子と出会った。母方三百年の譜（『乾坤の譜』）と、この義の譜は、義雄と光子のもとで一つになる。その先は、現代篇『家族の歩み』が受け継いでいる。

継承ノート ― 言葉の血、動く血。母方が博士の並ぶ理系の家系であるのに対し、義雄はただ一人の文系＝言葉の人である。そして母方にも、家系最古の「語学の人」がいた――フラマリオンを訳した大沼十太郎（→『乾坤の譜』）。二系統の言葉の血は、英語教師どうしの結婚（義雄と光子）で合流し、息子たち――文雄と恵のTOEICはいずれも九三〇前後――に流れた。義雄より前の父方に言葉の人がいたかは、これからの取材の宿題である。

もうひとつの遺伝は「動く血」。大学時代に自転車で北海道を巡った義雄のバイタリティは、ロードバイクにのめり込み、会社を興し、動きつづける次男・拓也へ――自伝の題『動いて、動いて、ここにいる』は、半分はこの血の申告である。誰に何が流れたかの総まとめは、現代篇『家族の歩み』巻末「継がれたもの」に。

記録する人の連鎖

この譜が書けたのは、記録する人たちがいたからである。母方では、およそ半世紀前、丸菱倉庫の便箋に一族の系図を書き残した坂本勝がいた（『乾坤の譜』）。父方では、家系図を保存し、二〇二六年、八十二歳の手で孫の代までを書き加えた義雄がいる。そして――二〇二四年の夏に父・正人を送ったばかりの従弟・成澤有が、明治から続く一族の戸籍謄本を一式そろえて、この取材に届けてくれた。有の誕生日は九月九日。伯母・光子と同じ日である。記録は、悲しみのすぐあとでも、誰かが手を動かさなければ残らない。この頁の一行一行は、その手の上に立っている。

この巻はまだ完成していない。八人きょうだいの一人ひとりに人生があり、苗穂の家に四季があり、海峡を渡った日の風の冷たさがあったはずだ。次の頁は、これからの取材を書く。

成澤勘左エ門 → 勘蔵 ― とよ → 金作（養子） ― いと → 三男 甚佐久 ― かつゑ（勝治郎家の婿分＝遠縁・同姓） → 七番目 義雄 = 池上 光子 → 文雄・拓也・恵 → 優太・晴香・開／太海

戸籍で確定済み（2026年7月）：①本籍＝山形県東田川郡横山村字前田（現・三川町）。②春雄の死（T13.4.7）→甚佐久の養子縁組（T15.7.26）→勝雄誕生（T15.8）の「数週間の逆転」。③勝美・宏・しげ子＝横山村生まれ、唯志以降＝札幌生まれ（渡道＝昭和8～11年頃・兄たちを頼る連鎖移住）。④義雄の生家は札幌市北八条東十一丁目395番地。⑤義雄×光子の婚姻＝昭和44年6月・岩見沢。⑥「大山のおばさん」＝六女・末子の嫁ぎ先。

要確認事項（今後の取材課題）

二〇二六年七月二十五日の父母面談と戸籍精読により、初版の課題の大半は解決した。残る課題は以下。

- 成沢道忠（村山・成沢城）と庄内・横山村の成澤家の接続――「落ち武者→庄内で農民化」仮説の裏づけ（約二百年の空白）。
- 「勘左エ門」襲名の確認――勝治郎が家督相続後に「勘左衛門」を名乗ったか（戸籍1～2頁の相続記載の精読）。
- 金作の実家（「飯井（長井？）大治郎」の判読）と、いと／いわの同一性。甚佐久とかつゑがどの代で分かれた遠縁か。
- 八人きょうだいの現況（存命・居住地・職業）と、連絡の取れるいところ。勝美の子「ノブちゃん」らの名・現況。宏の没年（戸籍の鉛筆メモ「H13.11.9」の確認）。
- 義雄の両親（甚佐久・かつゑ）の人柄と最期。苗穂の家の暮らしの細部（杏の木のある家）。

6. 『Delaware State News』の正確な掲載日、フルブライトの研究テーマ。人文学博士の授与日（履歴書内に二つの記載）。
北海道大学の課程博士の学位の有無。
7. 家紋・菩提寺・過去帳・墓の所在（横山村か札幌か）。

出典

SOURCES

- ・公的一次資料：成澤勘左エ門～勝治郎 改製原戸籍（全20頁・鶴岡市ほか発行）／成澤甚佐久 戸籍（全6頁・札幌市東区 平成7年認証）／成澤正人 除籍全部事項証明（札幌市手稲区・豊平区 令和6年発行）——いずれも成澤有氏（正人の長男）収集・2026年7月借用
- ・家蔵一次資料：成澤家家系図（2026年7月22日受領・写真。2026年7月25日 義雄本人の加筆訂正版を追加受領）／米デラウェア州紙掲載記事（成沢義雄・1995年）＝『Delaware State News』（教育比較）・『The Dover Post』1995年4月12日（コーラ特集）・人文学名誉博士号授与写真の計3点／全訳＝素材DB「一次資料_成沢義雄_米国新聞記事1995_翻訳」
- ・成沢城の写真・絵図（表紙・第一部）：**My favorite things about Yamagata**（山形の城跡紹介サイト／my-favorite-things-about-yamagata.com）ほかより。私的記録として出典明示のうえ掲載。
- ・成沢城・成沢氏・成沢道忠の史実：Wikipedia「成沢道忠」「最上氏」、山形市「成沢城跡」、攻城団、城郭放浪記ほか（2026年7月調査）。詳細は素材DB「ルーツ_成沢道忠_調査」。
- ・証言：成沢義雄（生年確認 2026-07-23／誕生日と命名の由来 2026-07-22）／成沢拓也（遠縁・同姓の伝承、住まいの遍歴 2026-07-23）
- ・関連資料：素材DB「ルーツ_成沢家父方家系図」（判読メモ）／「父_成沢義雄」（人物カード）／取材質問シート（92_取材質問_父母面談）

※本書は成沢家の私的な記録として編纂したものです。「要確認」の事項は取材の進展にあわせて更新してください。姉妹編＝『乾坤の譜』（母方）・『家族の歩み』（現代篇）。

編集：成沢拓也——ただし本書は、兄・文雄（構成の提案・考証）、弟・恵（成沢城の現地写真・戸籍調査の窓口）を含む兄弟三人の協力で編成したものである。